

イタリアの小・中学校における音楽科教育の変遷

— 1894年から現在までのプログラムに着目して —

大野内 愛

(2012年10月2日受理)

A Change of Music Education in Elementary School and Junior High School in Italy
— Focusing on programs since 1894 —

Ai Onouchi

Abstract: The purpose of this study is to examine the music education in Italy regarding changes of programs. As a result, it was found that the music education from the birth of a “song” to the present is divided into the following four periods: 1) a period when music was regarded as a means to accomplish the political purpose of fostering the spirit of patriotism, 2) a period when cognitive contents of music were emphasized, 3) a period when music was regarded as a means of spiritual education, and 4) a period when music was regarded as a communication tool closely related to daily life. In Italy, music education has been greatly influenced by the political matters or trends in the education. Furthermore, the purpose of music education in Italy has been education through music, rather than only teaching music. In other words, music is regarded as a means of education.

Key words: music education, Italy, program

キーワード：音楽科教育, イタリア, プログラム

1. はじめに

イタリアでは1859年にカザーティ法という教育法が定められ、教育に関するプログラム¹⁾のもと、義務教育が誕生した²⁾が、音楽科教育にあたる教科は含まれていなかった。小学校のプログラムにおいてはじめて「歌唱」に触られたのは1888年であった。しかし、教科としては存在せず、「追加訓練 (esercizio aggiunto)」として合唱が挿入されたにとどまっている。実際に「歌唱」が教科としてプログラムに含まれ

たのは1894年である。また中学校をみると、初めてプログラムが示されたのは1963年であり、そこには音楽科が教科として含まれていた。

筆者はこれまで、現在のイタリアの音楽科教育に焦点をあて、プログラムの内容や実際に使用されている教科書の分析を行うことにより、イタリアにおける音楽科教育の実態を探ってきた。しかし、イタリアの音楽科教育の特色を探るためには、教科として学校教育に「歌唱」が誕生してから現在までの流れを解明する必要があると考える。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：三村真弓 (主任指導教員), 古賀一博,
深澤清治, 千葉潤之介

他の先進国に比べ、イタリアの音楽科教育のプログラムについての研究は数少ない。中嶋 (2001) はイタリアの小学校の「1985年プログラム」および、中学校の「1979年プログラム」を取り上げ、音楽の基礎的な能力のあり方を探るとともに、その学習活動への展開

を探っている³⁾。また、Festa (1998) は著書において、音楽教育の価値について考える中で、立法で定められているプログラムから、教育における音楽について自身の見解を著している⁴⁾。Delfrati ら (1985) は1985年プログラムの施行にあたり、それまでのプログラムの内容を簡単に説明し、1985年プログラムへの移行についての注意事項などを示している⁵⁾。さらに、Delfrati (1989) は、中学校のプログラムについて、その変遷を追っている⁶⁾。しかし、音楽科教育が学校に導入された1894年から現在までの、小・中学校の連続性も含めた系統的な研究は見当たらない。

そこで本稿では、イタリアの学校教育における「歌唱」の誕生から現在までの音楽科教育に着目し、国の目指す音楽科教育の方向性の移り変わりを明らかにすることによって、イタリアの音楽科教育の特色を解明したい。

2. 小学校のプログラムの変遷

前述のとおり、小学校で「歌唱」に初めて触れられたのは1888年プログラムであるが、このときはまだ教科としては存在していない。実際に教科として歌唱教育が誕生したのは1894年プログラムである。また、2004年の改訂からは、小・中学校が同時に改訂されているため、後に示すこととする。ここでは、1894年～1985年までの小学校のプログラムの変遷を追う。

(1) 1894年プログラム

教科名「絵画・歌唱・体育・作業」 お祈りや讃歌により、徳や祖国についてなど甘美なことについて話し、精神を向上させる。静寂は必ずしも授業の音が中断されたわけではない。(中略) 祈ることにおいて、学校での歌は大切な役割と尊敬をもっている。それが願いや希望をかええてくれ、豊かな行為へと導いてくれる。
--

※ 「絵画・歌・体育・作業」のプログラム内容から「歌唱」に関する部分のみ訳出⁷⁾

この年のプログラムで初めて「歌唱」(canto) という学習内容が誕生した。しかしこのときはまだ「歌唱」科は独立しておらず、「絵画・歌唱・体育・作業」という教科の中の1つの領域であった。

1894年に教育長であった Baccelli が求めたプログラムの目的は、「祖国のことを知り、愛するというイタリアの需要と供給に見合う教育を行うこと」⁸⁾であった。その目的に応じて作成された1894年プログラムは、祖国を愛するという政治的目的を含んだ実証主義的なものとなっている。

それを受け、「歌唱」で扱った楽曲については、「お祈りや賛歌」と示されており、歌唱を学問的に捉えるのではなく、「祈り」を行う手段として導入されている。また、学習内容についての学年ごとの具体的な指示は

特になく、人生における歌唱の必要性について述べられており、歌唱が宗教上精神的に必要なものとして教科に組み込まれている。

(2) 1923年プログラム

表1 1923年プログラムの内容

学年	「歌唱」プログラム内容
1・2年生 歌唱教育における第一段階	1) 模倣による合唱 2) 音高練習:さまざまな高さや強さの音で発声する (cresc. や dim. をする。) 3) リズム練習:2 拍子や3 拍子を自然に手拍子でできるようになるまで、子どものリズム感を発達させる。
3年生	1) 模倣による合唱 2) 記譜・読譜の基本要素 (さまざまな音高, 五線譜, 音符, ト音記号の表記) 3) 記譜法 (notazione) の基本要素 (さまざまな音の長さの表記) 4) 2 拍子や4 拍子でのリズム練習 <訓練内容> a) 発声と姿勢 b) 基本的な記譜法によって書かれた楽譜を、音高をつけたりつけなかったりして、読んだり書いたり、階名唱で歌ったりする (音高のついた階名唱の標準的音域は, c4~c5。音高なしで練習するときには、音域を広げることができる。)。
歌唱教育における第二段階 4年生	1) 模倣による合唱と、読譜によって歌唱する初めての体験 2) 記譜法 (figurazione) の学習の継続。8分音符とその休符の表記。タイで結ばれた音符の音価。2分音符や4分音符に付けられた付点。 3) 単純な音程の具体的な概念 (2度・3度・4度・5度) 4) 長音階の具体的な概念 5) 3 拍子でのリズム練習 <訓練内容> a) 発声と姿勢 b) 模倣で学んだ歌を使って、読譜・記譜をする。 c) 基本的な記譜法によって書かれた楽譜を、音高をつけたりつけなかったりして、読んだり書いたり、階名唱で歌ったりする (音高のついた階名唱の標準的音域は, b3~d5。音高なしで練習するときには、音域を広げることができる。)。
5年生	1) 模倣や読譜による合唱 2) 記譜法 (figurazione) の学習の継続。16分音符と休符の表記。付点8分音符と3連符。 3) 音楽的表記の基本要素:変化記号 (シャープ・フラット・ナチュラル) 4) 音程の具体的な概念 (6度・7度・8度) 5) 短音階の具体的な概念 6) 6 拍子でのリズム練習。レガートやスタッカートなど、音やリズムについて補足する記号。テンポや表現を示す記号。 <訓練内容> a) 発声と姿勢 b) 模倣で学んだ歌を使い、読譜・記譜をする。 c) 基本的な記譜法によって書かれた楽譜を、音高をつけたりつけなかったりして、階名唱で歌う (音高のついた階名唱の標準的音域は, b3~d5。音高なしで練習するときには、音域を広げることができる。)。 d) 長三和音や短三和音の音程の構成

※ 「芸術教育」のプログラム内容から「歌唱」の部分を読み出す⁹⁾

※ figurazione を「記譜法」と訳しているが、これは音符の装飾を含めた記譜法である。

1894年の後、1905年にもプログラムが改訂されているが、ここには芸術教育及び「歌唱」は含まれていな

かった。その次の改訂が、この1923年プログラムである。しかしここでもまだ「歌唱」は独立しておらず、「芸術教育」という教科の中の1つであった。

1923年にジェンティーレ教育長 (Gentile, Giovanni) のもとで、初等教育局長に着任したロンバルド＝ラディーチェ (Lombardo-Radice, Giuseppe) は、特に学校における教師の重要性について強調し、教育は子どもが中心というよりは、教師の創造性が中心であると考えていた。また、子どもへの教育は、ファンタジー・芸術・遊びと関連する方が良いと考えた¹⁰⁾。

歌唱教育は、芸術教育の領域に含まれ、音楽の理論的な基礎を含むものとなり、想像力というよりはむしろ、音楽の理論を学ぶものという認知的側面を有したのものとなった。そして、音楽を精神的な訓練のための道具として理解するという以前の考え方から、音楽そのものを学ばせようとする考え方へ変わった。いわば、この教育改革が、イタリアにおける教科としての音楽教育の始まりと言える¹¹⁾。

小学校は5年制であり、1・2年生を「歌唱教育における第1段階」、3・4・5年生を「歌唱教育における第2段階」と定め、プログラムを示している(表1参照)。内容は、歌唱の技術的能力を向上させるためだけのものではなく、記譜など音楽の基礎的な内容についても扱うよう指示されている。Festa (1998) が述べているように¹²⁾、音楽理論に焦点を当て、音楽の基礎的な内容の訓練をするために歌唱を扱っていることがわかる。1～3年生までは模倣による歌唱だが、4年生からは読譜による歌唱も行うよう示されている。歌唱自体の指導方法については言及されておらず、教師に委ねられている。

しかし、音楽理論の教育は、「難しいもの」として実際には適用しないまま時間が過ぎた。それは、教師側の準備の不十分さが原因であり、結局、学校の授業においては、合唱ばかりを扱うことが多くなる傾向にあった¹³⁾。

(3) 1934年プログラム

表2 1934年プログラムの内容

年	「歌唱」プログラム内容
1・2年生	<ul style="list-style-type: none"> 模倣による、短くて易しい宗教曲、愛国曲、民衆の歌の歌唱。 手拍子しながら、偶数や奇数のリズムを練習する(2拍子、3拍子)。 音叉を使ってハ長調の音階の音高を学ぶ(五線譜の下の中から、第3間のドまで)。 大きくしたり小さくしたりしながら、音の発声法を学ぶ。 鼻から息を吸い、口から息を吐いて、呼吸の練習をする(身体のポジション: 頭を高く、上半身はまっすぐ)。 歌の演奏は、口を開いて、口を前に出す。
3年生	<ul style="list-style-type: none"> 模倣による単旋律の歌: 祈りの歌、愛国曲、地方の民衆のストルネッロの歌唱。

3年生	<ul style="list-style-type: none"> 「カンツォニエーレ」と呼ばれる、易しい歌の歌唱。 歌の演奏は、口を開いて、口を前に出す。 発声練習では、上行音階や下行音階を練習する。 音を伸ばしながら強したり弱くしたりする。 全音符、2分音符、4分音符の概念を知る。 前述の音価をたいたいたり、歌に出てくる2拍子や3拍子を手拍子する。 五線譜の音を階名唱する。線上の音と線間の音を理解する。 五線譜より下の音の表記(シヤド)。 音を個人や集団で読む。 音階や音程(2度や3度)を学習させ、できれば黒板に書く。
4年生	<ul style="list-style-type: none"> 前学年のように模倣による歌。独唱やカノン(2つ以上のグループに分かれ、異なるタイミングで同じメロディを歌う)や2重唱をする。 全音符や2分音符、4分音符、8分音符と、その休符を書く練習をする。 またその音符を同じ長さや違う長さで、読んだり叩いたりする。 自然な発声や芸術的なフレーズの区別を練習する。
5年生	<ul style="list-style-type: none"> 模倣による歌: 宗教曲、愛国曲、民衆の歌などの歌唱。 オクターブ表記を学ぶ。 メロブラスト(音部記号のない五線譜)や黒板に書かれた音と同じ、また異なる音を、音高なしや音高ありで階名唱する。 5つの母音(イーウーエーオー)で発声したり、伸ばしたりする。 レガートの音とスタッカートの音を学ぶ。 強くしたり弱くしたりする。 半分の声と広がりのある声を学ぶ。 臨時記号: シャープ、フラット、ナチュラルを学ぶ。 付点とその音価を学ぶ。 スラーとホルタメントを学ぶ。 4分音符と4分休符の関係を学ぶ。 3連符を学ぶ。 4度音程、5度音程、6度音程、7度音程、オクターブをメロブラストを使って学習する。 短音階の上行と下行を練習する。 長調と短調の概念(喜びと悲しみの感覚)を学ぶ。 メロブラストや黒板や適当なノートを使って、何度も繰り返し練習する。 易しい作品やさまざまな歌が書かれた黒板や紙を読む。

※ 「芸術教育」のプログラム内容から「歌唱」の部分を読み出¹⁴⁾

1934年にプログラムの再検討が行われたが、やはり「歌唱」は独立しておらず、「芸術教育」の中の1つであった。

この時代の大きな変化といえば、教育の中にファシズムの流れが強調されたことである。前書きの冒頭に、「イタリアの学校は、ファシズムのアイデンティティを吹き込むべきである。ファシズムを理解し、ファシズムを高尚にし、歴史的風土の中で生きるイタリアの若者へと教育することでファシズムの革命を創りあげるのである」¹⁵⁾と明記されている。したがって、「歌唱」のプログラムに見られる「愛国曲」というのは、「ファシズムの賛歌や歌を含むもの」¹⁶⁾であると考えられる。

1934年プログラムは、1923年プログラムと比較すると、教育内容がより具体的でわかりやすく、まるでリストのようになっている。また、1～5年生まで、歌唱は模倣により行うこととされており、1923年プログラムよりも易しい内容になっていることがわかる。音楽理論の学習については、このプログラム内容とは別

に示されている注意書きによると、「音楽理論については教師の歌や手本を使って、好きなようにつなぎ合わせて、徐々に教育していくこと」¹⁷⁾と示されており、1923年プログラムと比較すると、より弾力性のあるプログラムとなっている。

こうしたことにより、これまでの教師にも対応可能な内容に近づき、社会的にも評価されるプログラムとなった¹⁸⁾。

(4) 1945年プログラム

表3 1945年プログラムの内容

「歌唱」プログラム内容	
1・2・3年生	<ul style="list-style-type: none"> 模倣によって、芸術的な宗教曲や愛国曲や、民衆の歌をユニゾンで歌う。 何もない状態から歌い始めたり、前奏にあわせて歌い始める。 発声に配慮する。 声を大きくしたり小さくしたりする。 歌唱曲に合わせて手拍子する。
4・5年生	<ul style="list-style-type: none"> 模倣によって、芸術的な歌を、ユニゾン、2重唱、3重唱で歌う。 簡単な有名な合唱曲を歌う。 階名唱の基礎練習をする。

※「歌唱」科のプログラム内容を訳出¹⁹⁾

ファシズム体制が崩壊したあとの1945年プログラムは、国家の再生を目的としている。

このプログラムではじめて、「歌唱」が教科として独立した。内容を概観すると、改訂前に比べて非常に簡素なものになっている。特に音楽理論の学習についての記述はほとんどなくなり、階名唱のみが残っている。そして歌唱に関する指示が全体を占めている。しかし、歌唱に関する内容はあまり具体的ではなく、発声に関しても、「発声に気を配る」としか書かれていない。また、1934年プログラムと同様に、1～5年まで模倣による歌唱を行うよう示している。前書きに「歌は精神教育の1つである」ということも明示されており、歌唱活動を精神教育のための手段として捉えていることがわかる。

(5) 1955年プログラム

<p>教科名「歌唱」</p> <p>個人が深い感情表現をしたり、社交的な表現をするような合唱や、宗教曲や愛国曲や民衆の歌を模倣によりユニゾンや2重唱、3重唱で単純に、また芸術的に歌唱することは、子どもの声や耳や精神を磨く上で価値がある。したがって、歌の歌詞は子どもにもよく分かるものでなければならぬ。歌は音程が正しく、また美しく、快く感情表現がなされるべきである。だから、不完全な発音をしたり、声を張り上げたり、一本調子になったり、乱雑に叫んだりすることは避けなければならない。また、子どもに適した、易しくて芸術的な曲を聴くことにも配慮しなければならない。</p>
--

※「歌唱」科のプログラム内容を訳出²⁰⁾

1955年プログラムは、1945年の流れを引き継ぎ、「歌唱」科として独立しており、内容についても精神教育の傾向にある。プログラムの中から音楽理論に関する記述は完全に消え、歌唱についても具体的な指示はなく、単なる注意書きともいえる内容になっている。こ

のことは、子どもの個性の育成を教育の目的に位置づけていることが関係していると考えられる²¹⁾。このプログラムでは、宗教曲や愛国曲や民衆の歌を学ぶには音楽理論は必要ないと考えられており、プログラムを「修正する価値もないものであった」²²⁾と批判している学者もいる。

特筆すべき内容としては、初めて歌詞についての記述が見られたこと、そして、初めて鑑賞教育にも触れていることである。

(6) 1985年プログラム

表4 1985年プログラムの内容

内容	
知覚と把握	<ul style="list-style-type: none"> 音や環境音、それらの違いを認識すること、つまり、音の源(何か、遠さ、近さ、長さ、強さ、特徴(高さや音色)など)。 人間によってつくられたもの、動物によるもの、自然現象によるもの、器楽曲、機械の音やノイズを区別し、選ぶこと。 世俗的な音楽を聴くこと。 さまざまな民族の音楽の一部を聴くこと。オペラ、黒人霊歌、ジャズなど。
つくること	<ul style="list-style-type: none"> 話し声：母音と子音の形式の分析、そして声という音の生産についての分析をする(肺や横隔膜や声帯の機能)。 声を用いての遊び：話ししたり、読んだり、また声帯を使わずに話ししたり、読んだりすること。 歌声を使って、個人やグループで遊ぶこと：話し声と歌声の違いを分析する。 ジェスチャーとリズムと身体で音を作り出すことのような、身体の動きと関連した歌唱(手やひざをたたくながら歌うこと)。 人のさまざまな活動(演説、セレモニー、演劇、情報システム、映画、テレビなど)における、音楽的な声を使って、声のさまざまな音色の種類を研究したり、調査したりする。 自然に、もしくは計画的に発声されたさまざまな声の研究と分析を行う(自然な声：叫び、泣き、笑いなど、計画的な声：カンツォネッタ、オペラなど)。 音や雑音、たとえば自然音や楽器の音や、ほかの物の音の真似をして、声で遊ぶ。 パーカッションの音色やさまざまな音を体験したり分析したりする(金属でできたもの、木でできたもの、石でできたもの、電気でできたもの)。 音を作り出す他の手段を分析する。：こすったり振ったりするなど。 音楽的な音を作り出すのに利用されているさまざまな手段を調査したり、分析したりする。たとえば楽器族を理解する(吹奏楽器、打楽器、弦楽器など)。 音を作り出したり、それを普及・拡大・変形するための現代のシステム(マイク、アンプ、電気音の鳴る玩具、テレビ、電子楽器)を調査したり、分析したりする。 音楽の一部と関連させて、非常に易しいリズム形式や、アクセント、休符の把握、価値を再現するために打楽器を用いて音楽遊びをする。 ジェスチャーやパントマイム、ダンス、公園の活動や計画をつくりあげること(マリオンネットや指人形の劇、おどけの劇、視覚的の実現)と関連させて、扱いやすい楽器を使って、音楽の一部を演奏する。
読譜記譜	<ul style="list-style-type: none"> 自然な記譜の発想で、音や雑音を図形化する。 音楽や音楽外の音の長さや特徴を、伝統的な方法で図形的に記録する。 歌唱や楽器の演奏のために、読譜の易しいシステムを学ぶ。

※「音と音楽への教育」のプログラム内容を訳出²³⁾

1955年プログラムから30年という長い年月を経て、1985年に新たなプログラムが示された。これまでのものと大きく異なる点は、「音と音楽への教育」という教科名である。これまでの小学校では「歌唱」という教科名であったため、中心は歌唱であり、その学習の

中で必要に応じて音楽理論の学習を行っていたが、今回のプログラムで初めて小学校教育に「聴く」という活動が加わった。1955年プログラムでも鑑賞教育に触れていたが、設備が整わないなどの理由から、あまり重要視されていなかった。しかし、1985年プログラムでは、さまざまな視聴覚コミュニケーションが発達してきたという社会背景から、「聴く」という活動が非常に重要視されている。このプログラムの実行にあたっては、鑑賞活動を可能にするために、ラジオ、レコードプレーヤー、録音機などの機器を各教室に置くことが義務づけられている²⁴⁾。

「音と音楽への教育」では、「複雑な音の現実を知覚したり、理解したり、作ったりして伝わりやすく表現することによる、さまざまな音言語を使う能力の発達と育成」を目的としている。学習内容は学年ごとに記載されていないが、「知覚と把握」「つくること」「読譜・記譜」という3つの領域についてその内容が示されている。

注意書きとして、創造のプロセスにおいて、音楽と他の経験をつなぎあわせるために他教科（国語、運動教育など）との関連にも配慮すべきだと記載されている。他教科との関連は、これまでのプログラムには見られなかった内容である。

1985年プログラムは、「学校は、学校外での文化や生活についての考え方を構築するための場である」という目的をもっており。知識的な内容を身につけるといよりも、さまざまな経験をすることが重要視されている。

3. 中学校のプログラムの変遷

中学校のプログラムが初めて作成されたのは、1963年であり、その後、1979年、2004年、2007年に改訂が行われている。前述したとおり、2004年からは小・中学校が同時にプログラムの改訂を行っているため、2004年以降のプログラムについては、後述することとする。

(1) 1963年プログラム

表5 1963年プログラムの内容

	内容
(義務) 1年生	<ul style="list-style-type: none"> 自然や日常生活の音の現象の観察を開始する。 クラシック音楽から選ばれた音楽を少しずつ鑑賞する。 手をたたく練習をしたり、なるべくよく知られた文や詩の単語や句にアクセントをつけたりして、集団でリズムを練習する。 クラシックのレパートリーや、民衆の音楽に使用されている作品を、模倣により合唱練習する。 声域を知覚するとともに、長さを含む音の高さを知覚する。
(任意) 2年生	<ul style="list-style-type: none"> 代表的な作曲家の、レパートリーや校解から選択した音楽を少しずつ鑑賞する。 1年生で習得したリズム・旋律の記譜における基礎要素の概念を拡大したり掘り下げたりする。

2年生 (任意)	<ul style="list-style-type: none"> 合唱の練習をしながら、変化記号、付点、スラー、その他付属するものを学ぶ。 適切なパーカッションを用いて、さまざまな種類の音楽で、装飾されたリズムを手でたたく。 音高練習と、易しい旋律の階名唱を行う。 1声や2声の合唱を練習する。
3年生 (任意)	<ul style="list-style-type: none"> 音楽言語の発達に関して、重要な形式をもつと考えられるクラシックのレパートリーの音楽を鑑賞する。 楽器やその音色からそのものの個性を理解する。声を分類する。 1つや、同時に2つのパートに分かれて、リズム演奏を継続する。 易しいカンノンや2声やそれ以上の歌を歌う。 調性や旋律や対位法やハーモニーについての基礎知識を学ぶ。

※「音楽教育」のプログラム内容を訳出²⁵⁾

1962年の立法により統一中学校が誕生し、1963年にはじめて中学校のプログラムが作成された。1963年プログラムでは、教科名は「音楽教育 (educazione musicale)」であり、音楽を言語として捉え、子どもに音楽への愛好心を引き起こすことを目的としている。学習活動として示されているのは、リズム練習、合唱演習、そして音楽の鑑賞である。小学校の1955年プログラムにおいて、鑑賞教育に触れられてはいたが、実際にプログラムに鑑賞の活動が明記され、具体的に鑑賞曲のジャンルなどが示されたのは、この1963年プログラムが初めてである。

Delfrati (1989) は、「1963年プログラムは感情の解放を目的としており、音楽を教育するのではなく、音楽で教育するのである」²⁶⁾と述べている。したがって、1963年プログラムは、小学校の1955年プログラムと同様に、精神教育の流れを汲んでいると考えられる。

1963年プログラムでは、1年次でのみ「音楽教育」を扱うよう示されており、2・3年次では、必修教科ではなく、任意教科として位置づけられている。したがって1年次のプログラムの内容では認知的な内容を多く扱うが、2・3年次のプログラムでは、「気晴らし」の要素が強くなっている。

(2) 1979年プログラム

①音楽的聴覚の育成:リズム・旋律・ハーモニー・音色・形式によってつくられた音の識別と記憶の能力
②読譜と記譜:音楽の表示記号の意識的な活用をとおして、音と記号の一致を直感的に、また伝統的な形態から把握する。現代音楽に用いられている図形的体系からも示唆を得ること。
③動機づけられた鑑賞としての音楽作品の解釈:すべての曲の簡単な構成要素(リズム、旋律、音色など)を理解する能力
④表現的・創造的活動

※「音楽教育」のプログラム内容を訳出²⁷⁾

「音楽教育」の基本的な方針として、「音楽の知識や実践をとおして、青少年の表現・伝達の能力の育成に貢献する」²⁸⁾こととしている。「表現・伝達の能力の育成」という点からみると、音楽をコミュニケーションツールの1つとして捉えていることがわかる。実際の活動として、聴覚教育、鑑賞、記譜表現、声楽演奏、器楽演奏、創作が明記され、その活動は各々に関連を

もっている。

1963年プログラムとは異なり、1979年プログラムでは、学年ごとに内容が分割されていない。これは、子どもの実際のレベルを考慮して、状況に応じて授業を進めていくことを可能にするための配慮であり、実態に即した教育に重点を置いていることがわかる。また、3年間の内容の配分は学校の状況やその環境を考慮しながらなされるなど、教師の裁量に委ねられている。

4. 小・中学校のプログラムの変遷

2004年のプログラム改訂以後は、小・中学校が同時にプログラムの改訂を行っており、その系統性についても検討する。2004年以後、2007年にも改訂を行っている。また、2012年現在も新しいプログラムの改訂についての検討が行われている。ここでは、2004年及び、2007年のプログラムについて検討する。

(1) 2004年プログラム

表6 「2004年プログラム」の内容

	内容
小学校1年生	<p><演奏・創作></p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽的知識から離れて(楽音ではないものを使って)、例えば動機、環境、自然などから自分自身の体、声、物を活用して音楽を作る。その活動においては状況、ストーリーを考える。創作は、話し、演じ、歌うという自由な表現活動である。 <p><認識></p> <ul style="list-style-type: none"> 音の発生の原因が何かを見分け、解釈したことを生かしたり、記録したりする。 単なる日々の音であっても、自然な出来事音であっても、音に価値を与えること。
小学校2・3年生	<p><演奏・創作></p> <ul style="list-style-type: none"> 個人やグループで簡単な歌やフレーズを模倣演奏する。それは適切なものを使用することや、体によって作り出すことのできる様々な音を用いて伴奏する。また教育的道具の活用によって、体全体のジェスチャーや動きと関連づける。 <p><認識></p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽の聴取や演奏から、環境音と、物や道具を利用した音との関わりを理解した上で、ある基準の中での響きや発生音を認識したり、書いたり、分析したり、分類したり、覚えたりする。
小学校4・5年生	<p><演奏・創作></p> <ul style="list-style-type: none"> 楽譜や、他の簡単な表記形式といった伝統的表記方法を介して、音楽の断片から、音価や旋律の進行について、楽器や歌で楽譜を表現する。 クラスで楽器を使い、演奏をすることで、様々な旋法を体験したり分析したりする。その演奏とは、簡単なリズムのある音を利用したり、グループ演奏に参加したりして、短い音節や簡単な部分を解釈し、即興演奏したり模倣したり、再現する。 歌詞を読んだり、演じたり、劇化したりといった、歌唱技術の表現手段を使う。そして、個人やグループで単旋律や多声の簡単なフレーズを演奏する。 <p><認識></p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な時代や種類の音楽の一部を聴くことによって、音楽の基本的な構造を理解する。 音楽を聴くことで、表現の価値をより早くつかみ、言葉、動き、絵によって表す。 ダンス、ゲーム、仕事、セレモニー、様々な公演、宣伝などにおける音楽の役割を把握する。
中学校1・2年生	<p><器楽教育></p> <ul style="list-style-type: none"> 器楽教育における基礎の演奏技術を習得し、楽譜を読み、耳を使ってリズムやメロディーの簡単な一部を演奏する。 音楽センスを身につけ、即興について理解する。 <p><歌唱教育></p> <ul style="list-style-type: none"> 模倣や楽譜によって声で再生する。適切な楽器アレンジを伴った

中学校1・2年生	<p>ものを、独唱、または合唱する。様々な時代、ジャンル、スタイルにとらわれず、曲目を引き出す。</p> <p><音楽の創作></p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な性質(音楽、絵、言葉)の刺激から、リズムやメロディを即興で演奏する。 言葉や象徴的表現や舞台の動作などで音楽の輪郭を作り出す。 適切なソフトウェアを活用して、音の分析、実験、操作によって、簡単な物質音を作り出す。 <p><鑑賞・解釈・分析></p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽の基本構造や、他の関係の中での音楽における表現価値を認識したり分析したりする。それは様々な歴史上重要な種類、形式、スタイルの典型的な良い音楽作品を聴くことで成し得る。
中学校3年生	<p><器楽教育></p> <ul style="list-style-type: none"> 理解しやすい表記や(絵入りの楽譜や絵など)伝統的表記を利用して、個人やグループで様々な時代、スタイル、伝統の器楽作品を演奏する。 <p><歌唱教育></p> <ul style="list-style-type: none"> 独唱や合唱を、1人やグループで演奏する(せりふ、叙唱、合唱)。同声と混声の表現をコントロールし、配慮する。 <p><音楽の創作></p> <ul style="list-style-type: none"> 以前から存在する音楽を編曲し、その音符や表現を意図的に変更する。 声や楽器、電子技術、マルチメディアを利用して、簡単な音楽を創り出す。 <p><鑑賞・解釈・分析></p> <ul style="list-style-type: none"> 様々なジャンル、スタイル、伝統の音楽作品の特徴や形式を分析する。 見本から、歴史上の位置、ジャンル、形式を決定するための特徴を見分ける。 私たちの時代のマルチメディアのメッセージに含まれる音楽の中の、音楽や言語の間の関係を突き止める。 私たちの、また他の文化における音楽の社会的役割を理解する。

※「音楽」のプログラム内容を訳出²⁹⁾

2004年プログラムは、「個に応じた学習レベルのための国のプログラム」という名称がつけられており、子ども1人1人に目を向けたプログラムとなっている。

教科名は「音楽」となって、学年ごとに学習内容が示されており、中学校の1979年プログラムや小学校の1985年プログラムと比較すると、より整理がなされている。

「学校は訓練で得られた知識や能力を、個人的な能力へと発展させるために教育活動を行う」というプログラムの目的に基づき、小学校では1年生、2・3年生、4・5年生の3段階に分けられ、「演奏・創作」「認識」の2領域について学習内容が示されている。また中学校では1・2年生、3年生の2段階に分けられ、「器楽教育」「歌唱教育」「音楽の創作」「鑑賞・解釈・分析」の4領域について学習内容が示されており、小学校に比べて領域が細かく分類されている。しかし、その具体的な内容は記載されておらず、扱った曲の曲種や歌唱音域などについては示されていない。

ここで小・中学校でのプログラムの内容の系統性を検討する。歌唱教育や器楽教育、音楽の創作が含まれる表現領域を見ると、小学校1年では、創作の分野が主な内容となっており、声、物、体を用いての音探しを行うことになっている。小学校2・3年になると、簡単な歌を模倣演奏するよう示されており、ここから

実際の楽曲を用いての教育が始まっている。また、体でのジェスチャーとも関連づけて演奏するようになっている。小学校4・5年では、歌唱だけでなく、器楽演奏も行うよう示されており、模倣演奏だけではなく、楽譜を用いての演奏も求められている。また即興演奏といった記述も見られる。さらに歌詞を読んだり、演じたりしながら、歌唱表現を用いた劇化にも触れている。中学校1年になると、小学校4・5年から引き続き器楽演奏を行うよう示されており、即興演奏についても触れられている。また、ここで初めて明記されている内容としては、合唱を扱うことと、電子機器（ソフトウェア等）を用いた音の創作である。中学校3年生になると、創作の分野において、編曲という活動が導入されており、音符や表現を意図的に変更していくことが求められている。また、中学校1・2年に引き続き、電子機器の利用が示されている。

認知的領域に着目すると、まず小学校1年では、音の発生を発見し、その音に価値を与えることが求められている。小学校2・3年生になると、楽曲を用いた学習が導入され、小学校1年で学んだ環境音と、楽曲の中に現れる音との関係性について学ぶようになっている。さらに小学校4・5年では、音楽の基本的な構造を理解するとともに、社会における音楽の役割を理解するよう示されている。中学校になると、歴史上重要な楽曲を鑑賞することにより、音楽の特徴を理解し、分析するという活動が入る。また、中学校3年では、音楽の社会的な役割を理解するとともに、言語としての音楽の役割についても理解することが求められている。

小学校1年生の段階では、環境音など身の回りにある音に着目しているが、学年が上がるにつれ、実際の楽曲にも触れ、学習している。中学校になると、社会の中での音楽の役割にも着目し、中学校を卒業してからも生活の中で音楽を活用できるような、生涯教育の視点も含まれている。

(2) 2007年プログラム

表7 2007年プログラムの内容

	内容
小学校1・2・3年生	<ul style="list-style-type: none"> 音やさまざまな種類の音楽を、作曲・編曲・創作・即興演奏するために、声・楽器・音の出るものを使う。 音のさまざまな要素の基準に配慮し、表現に気を配りながら、簡単な歌唱曲・器楽曲をグループで練習する。 楽曲の内側にある音楽の基礎的な要素を理解し、識別する。 言葉、ジェスチャー、図を伴って表された楽曲の表現的・構造的様子を、聴くことにより捉える。
小学校4・5年生	<ul style="list-style-type: none"> 音に対する創造力を伸ばしながら、創造的・意識的に声・楽器・音の出る新しい技術を使う。 音高、表現、役割に配慮しながら、多声音楽を含む、簡単な歌唱曲・器楽曲を集団や個人で演奏する。 さまざまな時代や場所の文化を理解し、さまざまな種類やスタイルの音楽に含まれる機能的・美学的な様子を評価する。 美学上著しい作品や、さまざまなジャンル・起源の作品に含まれ

・小学校5年生	<ul style="list-style-type: none"> る音楽言語の構成の基礎要素を理解し、分類する。 ・伝統的・非伝統的な記譜システムを用いて、音や音楽の文法の基礎を表現する。
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな種類やスタイルの歌唱・器楽曲を、電子楽器なども用いて、個人や集団で表情豊かに演奏する。 ・進行中の音楽の構造や、リズム・メロディの単純な定型を利用して、歌唱・器楽曲を即興演奏、編曲、創作する。 ・音楽言語を構成する、より重要な要素のシステムを認識し、分類する。 ・音楽芸術において重大な作品を知り、演奏する。また、踊りや演劇、造形芸術やマルチメディアなどの他の芸術を融合させた音楽イベントを計画し、実現する。 ・伝統的な記号や、他の記譜のシステムを解説し、利用する。 ・自分自身の経験や考察の行程、音楽に関連した機会を活用して、音楽そのものの構造を理解する。

※「音楽」のプログラム内容を訳出³⁰⁾

2007年プログラムは、「幼児学校および第1課程の教育カリキュラムにおけるプログラム」という名称がついている。

このプログラムでは、中学校までの期間を「幼児学校」と「第1課程」に区分し、その教育内容を指示している。「第1課程」とは、小学校5年間と中学校3年間をあわせた期間である。特徴としては、小学校と中学校を「第1課程」として、系統的にカリキュラムを提示したことである。

また、教科間の領域の横断的な学習を行うため、教科を<言語・芸術・表現領域>、<歴史・地理領域>、<数学・科学・技術領域>の3つの領域にまとめて示したことも、2007年プログラムの特徴である。

教育の目的として、プログラムの中で何度も示されているのは、子どもの個としての人間形成である。「学校は、知識の画一化をすべきではない³¹⁾」と述べられているように、個の可能性や才能に応じた人間形成を実現することが求められている。そのための手段として、それぞれの学校は、①文化的な言語や知識について学習する機会を子どもに与えること、②子どもの自律性 (autonomia) を支援すること、③認知的・感情的・身体的・美的・道徳的・精神的・宗教的な教育を行うために、教育計画を立てて実現すること、④家庭・地域との連携を図ること、⑤自国、ヨーロッパ、世界といった集団に、意識的に参加できる子どもを育成することを目指さなければならないとされている³²⁾。

つまり、生きて行く上で必要な言語や知識については、学問としてしっかりと身につけさせた上で、自律性を育成することを目的としている。ここでいう自律性とは、感情や精神といった内面的な部分を各学校の理念によって計画的に教育し、その結果、家庭や地域はもちろんのこと、自国、ヨーロッパ、世界へと目を向けることのできるような能力のことを指している。こうして、個としての人間形成を行っていくことが、プログラムの理念として示されている。

その中で音楽科の内容は、領域別に分けられてはい

ないが、実際には創造的な内容、演奏に関する内容、鑑賞に関する内容、音楽理論に関する内容の4つに分けることができる。

まず、このプログラムの特徴ともいえる、第1課程の中での系統性について検討する。

創造的な内容に関する記述について概観すると、小学校1～3年次では、「声、楽器、音の出る物を用いて創作、即興演奏をすること」が示されている。「音の出る物」という記述があることから、この段階では、旋律などの創作というよりは、音遊びをする、といった程度の創作、即興演奏であると考えられる。これが小学校4～5年次になると、「楽音」(sonoro-musicale)という言葉が用いられ、より音楽的な創作が求められている。しかし、具体的にどの程度の創作を行うかは、明らかではない。さらに中学校では、「歌唱曲、器楽曲を即興演奏、編曲、創作する」と示されている。つまり、創造的な内容については、小学校1～3年次では「音」を扱い、小学校4～5年次では「楽音」を扱い、中学校では「曲」を扱うという系統性がみられる。

演奏に関する記述について概観すると、小学校1～3年次では、演奏形態は「グループで」という記述がみられる。ただし、「音の要素」や「表現」に配慮した演奏を目指していることから、グループで演奏をするが、合唱や合奏ではなく、斉唱や斉奏であることがわかる。演奏技術の未熟さに考慮し、このような記述がなされているのであろう。小学校4～5年次では、演奏形態は「集団や個人で」という記述に変わる。また注意することがらとして、「ピッチ」や「役割」という記述がなされていることから、独唱や独奏だけでなく、合唱や合奏が想定されていると考えられる。中学校では、演奏形態は「集団や個人で」と記述され、変化はない。変化したことの一つは、具体的な楽器名は示されていないが、「電子楽器」を用いるよう指示されたことである。また小学校では表現について、「表現に配慮して」といった程度の記述であったが、中学校では「表情豊かに」(modo espressivo)という指示に変わり、より高度になっていることがわかる。演奏形態についても、表現についても、系統性があるとは言いがたいが、易しいものから高度なものへと変化している様子がみられる。

聴取する楽曲に関する記述に目を向けると、聴取によって学習すべき内容は異なるが、小学校1～3年次では「楽曲」、小学校4～5年次では「重要で美しい楽曲」、中学校では「芸術的に重要な作品」とされている。系統性は明らかではないが、学年が上がるにつれ、聴取する楽曲が限定され、より芸術性の高いものへと変化していくことがわかる。

音楽言語の理解に関する記述では、小学校1～3年次では「音楽言語の基礎的な要素」の理解と判別、小学校4～5年次では「音楽言語の基礎的な構成要素」の理解と分類、中学校では「音楽言語の重要な構成要素」の理解と分類が、それぞれ示されている。つまりコミュニケーション媒体としての音楽を、一種の言語と捉え、その音楽言語について、学年が上がるにしたがって、「基礎的な要素の学習」から「基礎的な構成要素の学習」、さらに「重要な構成要素の学習」へと、展開されていることがわかる。ただし、基礎的な要素や構成要素の内容については、特に明記されておらず、抽象的である。

体験や生活、理論の学習をとおして音楽の基礎や構造を学び、それをもとに歌唱・器楽演奏、即興演奏や音楽の創作、他芸術との融合を行うという、音楽の理解についての方向性は示されているものの、具体的な内容や教育方法については提示されていない。個としての人間形成を基本的な目的としている中で、その目的に基づいた音楽科の学習目標の設定がなされているが、日本のような共通事項などが示されているということはなく、どのような内容を扱い、どのようなレベルまでが求められているのかは明確にされていない。

5. 考察

本稿では、イタリアの音楽科プログラムの変遷を概観することにより、イタリアの音楽科教育の特色を解明することを目的とした。その結果、以下の内容が明らかとなった。

まず、1894年プログラムに見られるように、イタリアの学校教育に「歌唱」が導入された背景には、祖国を愛する若者を育てたいという政治的目的があった。知識を培うためのものではなく、愛国の精神を培うための手段として音楽が用いられたのである。

1923年プログラムは、1894年プログラムとは全く異なる様相を呈している。学校は教師の創造性を中心に教育を行う場所であるという考えのもと、認知的内容の濃いものとなっている。教師の重要性を強調したプログラムであり、歌唱の技術の向上とともに、音楽理論の学習にも力を入れたものであったが、その内容は当時の教師の力量を考慮しておらず、実際には達成されないままであった。

この問題を緩和するために改訂されたのが、1934年プログラムである。1923年プログラムに比べ、内容がより具体的でわかりやすくなっており、何を教えなければならないのかがはっきりと示されている。内容も簡素化され、弾力性のあるものとなった。しかし、そ

の背景には、子どもたちに知識を育成することよりも、ファシズムのアイデンティティを吹きこむことが重要視されたということがある。1923年には音楽そのものを学問として学ばせようとする動きが始まったが、1934年プログラムでは、また国の事情に影響され、音楽が政治的な目的に利用されている。

ファシズムが崩壊したあとのイタリアでは、国家の再生が目的とされていた。1945年プログラムからは「歌唱」が教科として独立したが、その内容はさらに簡素化している。認知的内容はほとんど削除され、歌唱に関する指示が多い。また歌唱が精神教育の1つとして認識されており、1894年プログラムの内容と重なる部分もある。

さらに1955年プログラムにおいても、精神教育の手段としての「歌唱」という考え方は変わっていなかった。個性の育成を重要視しているためか、具体的な規定は一切見られず、どのような授業を行うかは、教師に委ねられていたようである。それまで扱われていなかった鑑賞教育に触れられていることは特筆すべき内容であるが、実際には視聴覚機材の普及が進んでおらず、鑑賞教育が行われていた実態はあまり見られない。

1963年には、初めて中学校に「音楽教育」という教科名で音楽科が導入され、プログラムが示された。精神教育の流れを汲んでいた1963年プログラムは、中学校1年までしか「音楽教育」が必修化されておらず、2・3年生においては任意教科として位置づけられていた。1955年プログラムでは触れられる程度の鑑賞教育であったが、ここでは、扱う楽曲のジャンルなどが明記され、鑑賞教育がより具体化した。

1979年には中学校のプログラムが改訂された。このプログラムでは、音楽を精神教育の1つとする考え方から脱却し、音楽をコミュニケーションツールの1つとして捉え、音楽と生活を結びつけることが重要視されている。このプログラムでは学年ごとに内容が分割されておらず、学校や子どもの状況に応じた内容の選択がなされていた。

1985年には小学校のプログラムが改訂された。これまでの小学校のプログラムでは、教科名は「歌唱」であったが、ここで初めて「音と音楽への教育」という名称になった。視聴覚機材の普及に伴い、音楽活動は、歌唱活動にとどまらず、器楽活動や鑑賞活動にまで広がった。中学校の1979年プログラムにみられるように、1985年プログラムにおいても、学年ごとの内容の分割は見られない。したがって、実態に即した教育を行うことに重点を置いていることがわかる。

2004年プログラム以後は、小・中学校が同時にプログラムの改訂を行っている。これまでは小学校と中学

校が各々にプログラムの改訂を行い、その間に系統性は見られなかったが、このプログラムからは、小学校から中学校への系統性をみることができる。環境音など生活の中にある音に注目する段階から、認知的な内容を学習することをとおして、最終的には社会における音楽の役割を認識し、生涯学習の視点から音楽教育を行うという流れが見られた。音楽と生活を結びつけ、音楽をコミュニケーションツールの1つとして捉えるという基本的な考え方は、中学校の1979年プログラムや、小学校の1985年プログラムと変わっていない。個に応じた学習を提供することを新たな目的とし、以前のプログラムが整理され、弾力性のあるものとなっている。

2007年プログラムでも、1985年プログラム、2004年プログラムからの流れを受けて、個としての自律した人間形成を大きな目的として掲げている。しかし音楽科の内容はさらに簡素化され、具体性のないものとなってしまっている。このプログラムでは、学習の方向性は示されているものの、具体的にどのような能力を求めているのかがわかりづらい内容になっている。どのレベルまでを求めているのかが明確でなく、学校や教師に委ねられている部分が多い。また、これまでのプログラムとは異なり、小学校および中学校を「第1課程」として学習内容を系統的に示しているが、内容が具体化されておらず、小学校において身につけるべき能力および、中学校において身につけるべき能力が明らかでない。したがって、第1階梯としての指針を系統的に示したとしても、その効果は期待できない。学校や教師に委ねられている部分を多く含むこの指針では、目標の達成という面からみれば、各生徒の音楽的能力にあわせた目標設定が行える可能性を秘めているが、教育格差を生み出さないためにも、教育内容の規定はより具体的に示す必要があるだろう。

ここまでを概観すると、「歌唱」の誕生から現在までは、音楽科という教科の捉え方から4つの時代に分けることができる。

- ①愛国の精神の育成という政治的目的への手段の時代 (1894年)
- ②認知的内容が重要視される学問としての性質が強かった時代 (1923年・1934年)
- ③精神教育の手段の時代 (1945年・1955年・1963年)
- ④音楽は生活に密着したコミュニケーションツールとして考えらえた時代 (1979年・1985年・2004年・2007年)

音楽科のプログラムの内容量だけをみても、改訂によって、非常に簡素なものもあれば、多くの内容を含むものもある。また非常に具体的なものもあれば、抽

象的すぎるものもある。つまり、音楽科が政治的な事柄や教育の流れに大きく影響されているのである。イタリアの音楽科教育の特色は、音楽を教育すること自体を目的とするのではなく、音楽で教育すること、すなわち音楽を手段として扱うことにあるといえよう。

イタリアは歴史上、ヨーロッパにおける音楽文化の中心であったことも多く、オペラ誕生の地でもあった。また、ロッシニ、ベッリーニ、ヴェルディ、プッチーニなど著名な作曲家を多数輩出した国でもある。音楽院など専門教育機関も充実しており、音楽そのものを教育することは、一般の学校教育の目的ではないのではなからうか。だからこそ、学校教育における音楽は精神教育やコミュニケーションツールなどの手段としての役割を担う場合が多くなったのだろう。

【注・および引用文献】

- 1) 本稿でいう「プログラム」とは、原語では「programmi」と書かれており、日本でいう学習指導要領にあたるものである。
- 2) 1859年のカザーティ法による。
- 3) 中嶋俊夫「イタリアの「学習指導要領」にみる<音楽言語 Linguaggio Musicale>の理論的基礎—Gino STEFANIの記号論的アプローチをてがかりに—」『音楽教育学』第30巻、第4号、日本音楽教育学会、2001、pp.1-14.
- 4) Festa, D., *Educazione musicale nella scuola*, La scuola, 1998.
- 5) AA.VV., *L'Insegnamento Musicale in Italia*, Annali della Pubblica Istruzione, Le Monnier, Firenze, 1985.
- 6) Delfrati,C., *Orientamenti di pedagogia musicale*, Ricordi, 1989.
- 7) イタリアの教育・大学・研究省ホームページより 訳出 <http://www.istruzione.it/>
- 8) Venzetto, L., L'insegnamento dell'identità nei Programmi di storia(1860-2002), *materiali di storia*, n.23, Istresco di Treviso, 2002, pp.72-73.
- 9) イタリアの教育・大学・研究省ホームページより 訳出
- 10) オムリ慶子「モンテッソーリ法批判再検討 その2 —観念主義 (G. ロンバルド=ラディーチェ) の立場から—」『日本保育学会大会研究論文集』53巻、日本保育学会、2000、p.5.
- 11) 大野内愛「1920年代のイタリアにおける小学校歌唱教育の特質—「1923年プログラム」と小学校歌唱指導書 (1924) の分析をとおして—」『音楽表現学』vol.9、日本音楽表現学会、2011、p.57.
- 12) Festa, D., 1998, op.cit., pp.29-30.
- 13) AA.VV., 1985, op.cit., p.24.
- 14) イタリアの教育・大学・研究省ホームページより 訳出
- 15) 同上
- 16) AA.VV., 1985, op.cit., p.24.
- 17) イタリアの教育・大学・研究省ホームページより 訳出
- 18) AA.VV., 1985, op.cit., p.24.
- 19) イタリアの教育・大学・研究省ホームページより 訳出
- 20) 同上
- 21) Paternostro, L., *Ricordi di vita magistrale*, Phasar, 2001, pp.79-85.
- 22) AA.VV., 1985, op.cit., p.25.
- 23) イタリアの教育・大学・研究省ホームページより 訳出
- 24) AA.VV., 1985, op.cit., p.33.
- 25) イタリアの教育・大学・研究省ホームページより 訳出
- 26) Delfrati,C., 1989, op.cit., p.94.
- 27) イタリアの教育・大学・研究省ホームページより 訳出
- 28) 同上
- 29) イタリアの教育・大学・研究省ホームページより 訳出
- 30) 同上
- 31) Ministero della Pubblica Istruzione : MPI, *Indicazione per il curricolo per la scuola dell'infanzia e per il primo ciclo d'istruzione*, tecnodid, 2007, p.16.
- 32) Ibid., pp.15-20.